

# 万吉だより

MA

GECHI

NEWS

第3号 平成16(2004)年12月

所 感

館長 坂 浩 秀 一

2004(平成16)年3月30日付、埼玉県教育委員会(稲葉喜徳教育長)から学長宛、立正大学博物館を「博物館に相当する施設に指定」した旨の通知が届きました。

2002(平成14)年4月1日に開館した当館にとって、うれしい通知でした。開館準備の1年間、開館して2年間、都合3年目のことでした。

開館以来、館の活動として、平常展示の検討と充実を核に、年1回の特別展と企画展の開館など、関係者はそれぞれの分担にしたがって尽瘁してきましたが、そこには常に大学執行部の理解と教職員各位の協力があつたことは言うまでもありません。大学付設の博物館としては、小さな施設であるかも知れませんが、旧制大学以来、多くの先輩によって収集(蔵)・活用されてきた資料を総覧する方向性が定められたことは誠に幸いでした。そこには、有縁の皆様方によって特色あるコレクションが寄贈され、当館の目玉として各方面に喧伝されています。吉田格氏(本学卒)の日本石器時代遺物、眞鍋孝志氏(梵鐘研究会会長)の梵音具(とくに梵鐘)を中心とする仏教関係遺品は、吉田コレクション、撫石庵(眞鍋)コレクションとして贈交されています。また、1930年代以降、本学に職を奉じてきた考古学関係者による発掘調査によって得られた多くの考古学的資料、加えて、1966~76年の10年間、仏教学・考古学・地理学の関係者によるネパールのティラウラコット遺跡発掘資料の所蔵と展示は、大きな特色として関係方面の注視を受けています。

大学博物館の活動は、所蔵資料の展示と共に特定テーマを定めての展示会の開催も必要と考えてきた私達は、春の企画展と秋の特別展を開催することによって当館の存在意義を内・外に理解して頂くことにしました。

2004年春の企画展は「南極、自然と人」、秋の特別展は「釈迦の故郷」を開催しました。企画展には国立極地研究所と(財)日本極地研究振興会、特別展には(財)全日本仏教会の協力と後援を頂きました。とくに企画展には吉田榮夫前学長の全面的なご支援とご協力を頂き、好評を博しました。ともに、ささやかな『図録』を作成して配布する一方、記念講演会をそれぞれ開催し、本学の学生諸君はもとより学外からも沢山人達の参加が得られたことは幸いでした。

さらに、2004年12月には、仏教学部卒業制作展として「仏教美術の「存在」に遭う」と題する特展が当館において開催されました。立正大学の知的財産の情報発信の一翼を荷う存在であり続けたい、と願っている当館の開設目的を实践した企てであったと思います。

この度、相当施設として指定されました当館としては、日常的に展開しております活動をさらに進めたい、と考えています。

改めて、皆様方のご支援とご協力をお願い申し上げます。

## 「南極、自然と人」企画展 に寄せて

吉田榮夫



本年4月、坂詰立正大学博物館長のお勧めで、第2回企画展として「南極、自然と人」を開いて頂いた。国立極地研究所から“コンドライト隕石”と“鉄隕石（隕鉄）”を、また財団法人日本極地研究振興会から中生代爬虫類化石“リストロサウルス”の復元模型を出展して頂き、私が採集した岩石標本、数葉の地図、写真などで何とか形ができた。これは坂詰先生のアドバイスと、上野恵司講師、田村佳道囑託の博物館スタッフ、博物館補助の内田さんの大変なご尽力によるものであった。

わが国が国際地球観測年の重点観測計画であった南極観測に参加を決めたのは1955年、翌年2月朝日新聞社主催の北海道濤沸湖での最初の訓練に、大学院修士課程修了の身で参加させて頂いて以来今日に至るまで、13回の現地行を含め何らかの形で南極に関わらせて頂いたので、“南極”は私の人生そのものである。企画展は改めてそうした南極バカの来し方を、少しの苦みと多くの甘美さをもって振り返らせてくれるものでもあった。もちろん、これを機会に見に来て下さる方々に少しでも南極を知って頂き、併せて坂詰館長の理系の展示も行いたいという意図にお応えしたいということも、願ったことであった。

かくて、展示では手元の資料によった部分の多い、私の個人的な色彩が強いものとなった。これまでほとんど皆さんにお見せしたことのない写真も展示させて頂いた。そのうちの1枚は次のようなものである。1959年12月、南アのケープタウンで観測船宗谷がベルギー隊のチャーターした観測船エリカ・ダンと舷を接して碇泊したとき、グリーンランドエスキモー犬の生まれたばかりの仔犬を贈られた。宗谷の船上で育てた仔犬（名前はベル

ギー隊の要望でベルジカ（略称ベルガ）とした）を連れてこれからヘリで昭和基地に向かおうとするときの写真で、これから私はさまざまなことを思うのである。犬をくれたベルギー隊の友情（彼らのうちの6名は第4次越冬中の1960年10月昭和基地に飛来し、悪天候のため19日間にわたって滞在することとなった）、1年余りにわたる犬楯係としての樺太犬とベルガの飼育、宗谷に比べて新造で設備の整ったエリカ・ダンを訪れ、大変羨ましく思ったこと、そしてその26年後、エリカ・ダンと同じ仲間のオーストラリアのチャーター船ネラ・ダンの観測船しらせによる救援に隊長として参画したことなどなどである。

野外調査に従事する研究者はいずれも同じであろうが、自分で撮影した写真にはいずれもこうしたいろいろな記憶や思いがある。採集した標本もそうである。これをささやかながら一堂に展示して頂いて、感慨を新たにしたい。お勧めにより陳列した昭和基地郵便局で日ごとに消印を捺した切手なども、あるいは皆さんの興味を惹いたかもしれない。

初日の朝、私が館内にいた際、たまたまニュージーランド、インバカーギルの高校生の一団が、先生と父兄に引率されて見学に来館した。ニュージーランド隊参加の際の写真もあり、直接説明できたのは、偶然というにはあまりにもタイミングがよく、運命的とも感じられたのである。

（前立正大学学長・国立極地研究所名誉教授）



ネラ・ダン

## 「吉田 格コレクション」 の意義

池上 悟



平成16年度に博物館相当施設として正式に認可された熊谷校地に所在する立正大学博物館の所蔵品は、昭和30年代以降に博物館長である坂詰秀一博士による歴史考古学の実践的研究として全国各地の窯

跡の発掘調査により出土した窯業資料、仏教系大学である立正大学が昭和40年代に釈迦の故国であるネパールにおいて実施した発掘調査により仏教遺跡から出土した資料、真鍋孝志氏から寄贈された鐘のコレクションである「撫石庵コレクション」とともに、吉田格氏によって寄贈された考古資料が主体をなしている。

立正大学博物館は、その淵源を考古学資料室に求めることができる。立正大学における考古学は旧制大学の当時から実践されてきた歴史を有しており、昭和53年に逝去された久保常晴博士による仏教考古学を中心とする歴史考古学分野、吉田格氏の先史考古学分野を双璧とすることができる。

吉田格氏は大正9年に鳥取県八頭郡に生まれ、大正12年に教師であった父親の辰次氏に従って上京され、昭和16年に立正大学を卒業されている。戦後は日本考古学研究所・武蔵野文化協会・都立武蔵野郷土館に勤務され、昭和45年以降は長らく立正大学文学部の講師を勤められ多くの後進を指導されてきた。現在84歳になられ武蔵野文化協会考古部会長、東京都三鷹市遺跡調査団長を勤められ、目黒区碑文谷にお住まいである。

縄文研究の先達である山内清男博士・甲野勇教授、古墳研究の後藤守一博士などの指導をうけられて、主として縄文・旧石器時代の調査・研究を推進してこられた。主要なところは茨城県花輪台貝塚・広畑貝塚、千葉県城之台北貝塚、神奈川県称名寺貝塚、東京都茂呂遺跡・赤塚城跡遺跡などで

あり、これらの遺跡からの出土資料は、関東地方における縄文時代研究の基準資料として重要な位置を占めている。

これらのうち特に東京都杉並区・井草遺跡出土土器は南関東地方の縄文時代早期、神奈川県横浜市・称名寺貝塚出土土器は縄文時代後期の土器型式として基準となっている。長年の研究成果を昭和48年に『関東の石器時代』として纏められ雄山閣から出版されている。

昭和55年に勤務先の都立武蔵野郷土館を退職され、長年蒐集されてきた膨大な考古資料を母校の研究と教育のために「吉田格コレクション」として立正大学に寄贈された。蒐集された資料は、自身が直接発掘調査された関東各地の縄文時代遺跡の出土品が中心をなすほかに、青森県から福岡県に至る全国各地の遺跡からの出土品を含んでおり57遺跡を数える。特に内容豊富な資料は称名寺貝塚からの出土品であり、多量の土器のほかに、豊富な骨角製のヤス・モリなどの漁具、多量のイルカ・クジラなどの獣骨が特徴的である。

またコレクション中には、尾張出身で幕末に著名なシーボルトの教えを受け、後に我が国最初の理学博士となった伊藤圭介蒐集の石器が幕末の旧状を留めて含まれている。

寄贈を受けて平成2年には、コレクションの主要な資料の写真図版と遺物・遺跡の解説からなる200頁の『吉田格コレクション・考古資料図録』が立正大学学園から出版されている。

(文学部教授)



称名寺式土器

## 博物館視察報告

### タイに古鐘を訪ねて

上野恵司

昨年、一昨年に引き続き、平成16年9月3日から9月11日まで、仏教考古学研究奨励基金委員会（坂詰秀一委員長）から、梵鐘の比較研究と博物館視察を兼ね、タイへ派遣していただいた。

タイではまず、北の大都市チェンマイの近郊にあるワット・ブラ・タート・ドイ・ステーブを訪れた。この寺は、チェンマイ市外を見渡せる山頂に位置する寺院で、1383年にクーナ王によって建立されたタイ北部で最も神聖な寺院の1つといわれる。この寺にある鐘は、懸垂の方法が2種類認められ、1つは、単独で鐘楼内に懸かっているもの。他は、礼拝堂などの壁に沿って2～30の鐘が連なって吊るされているものである。前者は大形の鐘であり、後者はやや小形であった。

チェンマイ市内では、旧市街にある最も古い歴史をもつワット・チェン・マンや最も格式の高い寺院であるワット・ブラ・シン、巨大な仏塔が残るワット・チェディ・ルアンなど現在まで続いている寺院と国立博物館を見学した。それらの寺院にある鐘もワット・ブラ・タート・ドイ・ステーブと同じように概ね2つの様相が認められた。

その後、スコータイ時代、王の直轄地であったシー・サッチャナーライ遺跡に赴いた。ここでは、特にスリランカ様式の鐘形を呈する仏塔があるワット・チャーノ・ロームを中心に周辺の寺院跡を見学した。

次に、スコータイ遺跡を見学した。ここで最も注目されたのは、スコータイ第三代ラームカムヘン大王の像がある地区の入り口、城壁の東門付近に懸かっていた鐘であった。大王は、スコータイ時代の最盛期を築いた偉大な人物であり、説明文によれば、国民が王の助けや調停を求める時に、この鐘を鳴らしたとの故事から、鐘がこの場所に懸けてあるとのことであった。

この内容が事実ならば、少なくとも王の時代には鐘が存在していたことが明らかになり、またそ

の意匠なども参考でき、重要な資料となりえる。この王の話は、後に訪れたバンコクの国立博物館所蔵の壁画にもみられたため、かなり信憑性が高いと思われるが、スコータイ遺跡内に懸けてあった鐘と壁画に出てくる鐘の意匠が異なっており、今後の課題も残るものである。

シー・サッチャナーライ遺跡、スコータイ遺跡を見学するに当たり宿泊地としたのは、スコータイ時代は首都として栄えたピッサスロックであった。この町では、タイで最も美しいとされる仏像の1つであるチンナラート仏があるワット・ブラシー・ラタナー・マハタートと民俗資料博物館を訪れた。また、博物館に近接して仏像鑄造所があり、そこでは仏像以外にも鐘を含む仏具全般が鑄造されており、その鑄型や製造工程を見学した。

その後、タイの首都バンコクへ移動し、北部のアユタヤー遺跡を見学した。アユタヤー遺跡は、川に囲まれた島の町であり、1350年から417年間にわたり王朝の中心地として栄えた都市である。また、遺跡内には、チャオ・サン・ブラヤー国立博物館があり、ワット・ブラ・マハタート出土の仏舍利など貴重な資料が展示されていた。

バンコク市内では、エメラルドの仏像で著名なワット・ブラケオや巨大な涅槃仏で有名なワット・ポーなどを訪れ鐘楼と鐘を見学した。

ついで、今回の最大の目的であるバンコク国立博物館に向かった。国立博物館では、学芸員のSirin氏とお会いする予定になっていたが、Sirin氏が大学出校日だったため、代わりにDisapong



ワット・ブラ・タート・ドイ・ステーブ (1)





ワット・ブラ・タート・ドイ・ステーブ (2)

氏が対応してくれた。Disapong氏からは、博物館に展示している鐘関係の資料を丁寧に説明して頂いた。

特に最初に訪れたワット・ブラ・タート・ドイ・ステーブにみられた2つの鐘の様相に関しては、鐘楼に懸かっている単独の鐘は、宗教儀式に関係して使用され、連なっている鐘は、庶民が仏への願いを込め奉納したものであることをご教示頂いた。この点は、今回調査した鐘の銘文からも窺うことができ、前者は経典の抜粋や鎮護国家の願いが刻まれている場合が多く、後者は概ね亡くなった人への供養と、鑄造にかかった費用などが刻まれていた。また、刻まれた文字についても、タイでは時代と伴に文字の形が変化しており、それにも注意するよう、ご指摘頂いた。

また、立正大学博物館所蔵のタイの鐘は、日本の竜頭に当たる鐘を懸垂する部分に2種認められ、1つは鐘を懸垂する部分が、鐘身に把手状に繋がるものであり、他は鐘身から4つの把手状のものが伸び中央で交わり、その上に懸垂用の円環が付くものであり、同様な形は今回も多数確認できた。この相違について質問した所、明確ではないがそれは時代差であり、前者の方が古いと思われるとの見解を示された。

さらに大学所蔵のタイの鐘には、着色したのも認められる点についてお聞きした所、これも時代差であり、着色するのは新しい傾向にある点をお教え頂いた。

鐘の叩き方については、タイの鐘は、撞座と思

われる丸い部分が鐘身下半、縦帯と横帯が交差する部分に認められるものの、現在では内部から舌状の棒が下がっており、その棒を使って内面を叩くようになっているが、本来は撞座が認められるものは日本の梵鐘と同じように、その部分を叩く方が正式な叩き方である点など、その他数多くの有益なご教示を頂いた。

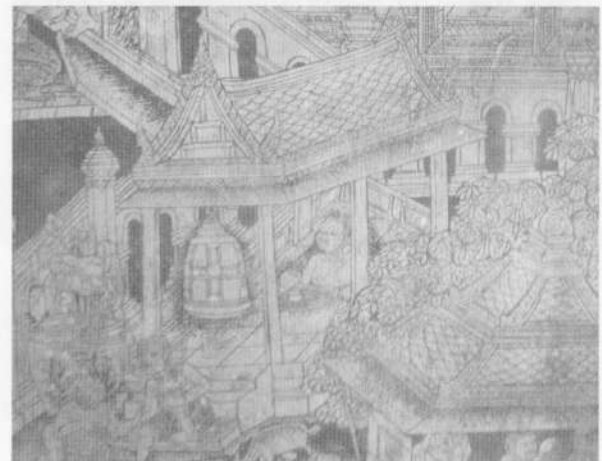
また、先に述べたスコータイ第三代ラームカムヘン大王に関する壁画については、実物の前で詳しく説明を受け、写真撮影の許可も頂いた。

最後にDisapong氏は、タイでは鐘を仏教芸術として研究の対象とするが、その研究も少なく、考古学的には殆ど注目されておらず、不明な部分が多いと述べられ、その導入の問題など今後の課題が多いとし、現在では最も古い鐘はスコータイ時代であるが、北部を詳細に調査すればさらに古い鐘が発見される可能性を指摘された。

また、タイの鐘が日本の立正大学の博物館に所蔵されていることについては、是非機会があったら来館して、見学したいと述べられ、今後メールなどを使用し、引き続き情報交換することを約束し、博物館を後にした。

最後に、仏具街を訪れ、現在奉納される鐘を見学し、日本への帰途についた。

(本館専門職員・文学部特任講師)

ラームカムヘン大王に関する壁画  
(バンコク国立博物館蔵)

## 展示資料の背景 (3)

### 弥生時代の資料

坂詰 秀一

#### (1) 東京都久ヶ原遺跡

久ヶ原遺跡は、東京都大田区久ヶ原に存在する弥生時代の集落遺跡として考古学界に著名であるが、南関東の弥生時代後期の標式遺跡として杉原荘介氏によって設定された久ヶ原式土器の出土地でもある。久ヶ原遺跡は本学大崎校舎の至近地に位置していることもあって、1930年代に本田茂一氏(当時・立正大学助手)や久保常晴先生によって発掘された土器が古くから本学に所蔵されていた。森本六爾・小林行雄氏の『彌生式土器聚成圖録』(昭和13・14年)にも「立正大学所蔵」として実測図が収められている。一方、本遺跡は、森本氏によって弥生時代の竪穴住居跡の平面プランが発掘によって明らかにされた最初の例であるが、その発掘には若き日の久保先生が近くの文化住宅から流れるピアノを聞きながら協力した、と何回もお話しを伺った。所蔵されている土器は、久ヶ原式と弥生町式が主である。

#### (2) 千葉県寒風遺跡

寒風遺跡は、千葉県松戸市中和倉寒風に存在する弥生時代後期の集落遺跡である。昭和37(1962)年に弥生時代後期の集落調査を目的にして発掘した。その結果、環状に分布する5軒の竪穴住居跡が発掘され竪穴中から後期の前野町式土器が出土し、前野町式期の小規模集落の実態を明らかにすることができた。報告は、坂詰秀一・関俊彦「中和倉寒風遺跡」(『松戸市文化財調査報告』1)として発表した。

#### (3) 神奈川県加瀬遺跡

加瀬遺跡は、神奈川県川崎市の加瀬の台地上に位置する。至近地には弥生時代の貝塚として注目された南加瀬貝塚がある。加瀬山と称されている

台地上には、加瀬古墳群が存在し、昭和26(1951)年には西南傾斜地に営まれた第3号墳が久保先生によって発掘され、「川崎市加瀬山第3号墳発掘報告」(『銅鐸』8)として発表されている。弥生時代の集落遺跡の発掘は昭和37(1962)年に実施され、重複した竪穴住居跡と弥生町式期の土器が発掘された。概要は、坂詰秀一「神奈川県川崎市加瀬山遺跡」(『日本考古学年報』10)として紹介した。

#### (4) 東京都前野町遺跡

前野町遺跡は、東京都板橋区前野町に存在する弥生時代後期の集落遺跡である。南関東弥生時代の編年中、後期末に位置づけられている前野町式土器の標式遺跡である。昭和36(1961)年、前野町式期の竪穴住居プランを知るために発掘した。当時、前野町遺跡出土の土器は著名であったが出土遺跡の実態は分明でなかった。発掘の結果、隅丸方形の竪穴住居跡の検出に成功したが、出土土器は木葉底をもつ壺形土器の破片に過ぎなかった。ただ、寒風遺跡(前記)と共に立正大学の考古学が挑んだ弥生時代後期集落の実態解明の試みとして有用であったと言えよう。報告は、坂詰秀一・関俊彦「東京都前野町における弥生時代遺跡の調査」(『武蔵野』41-2)として発表した。

#### (5) 甕棺と銅弋

弥生時代の遺物として九州出土の甕棺と銅弋(基部欠)が展示されている。甕棺は、福岡県出土の後期の2例である。この資料は、上野精志氏(故人・本学卒業生)が、福岡県下出土例を教材として寄贈されたもので、藤井功氏(故人)のご厚意によって本学に齊された資料である。幽明界を異にされたお二人のご厚情による。銅弋の破片は、福岡県須玖の出土と伝えられている広形品である。本品は、坂詰が教材として古物商から購入したもので、博物館の開設に伴い寄贈した。形状より北九州地方の出土品であることは明らかであるが、かなり以前の出土品のようで古調の桐箱に「伝須玖出土」と墨書されている。

(本館館長・文学部教授)

## NEWS

## 平成16年度 第1回博物館運営委員会

日 時 7月12日(月) 15:00 ~ 16:05  
 会 場 大崎校舎 第2会議室(1号館2階)  
 出席委員

坂詰秀一・坂本仁・澤田裕之・坂輪宣教・三友量順・野沢佳美・上野恵司・田村佳道(事務局囑託)

本日の出席者は7名、欠席者2名の報告があり、博物館規定第10条の2項により成立。



第1回 運営委員会

## 第2回企画展

4月12日(月) ~ 5月11日(火)

「南極、自然と人」

— 南極観測の記録から —

(協力: 国立極地研究所・(財)日本極地研究振興会)

記念講演会

日 時 5月8日(土) 13:00 ~ 15:00

会 場 立正大学熊谷校舎1号館1107教室

演 題

「南極に魅せられて半世紀」

吉田榮夫(前立正大学学長・国立極地研究所名誉教授)

## 職員の動向

6月4日(金)・5日(土)

平成16年度全国大学博物館学講座協議会全国大会

会 場: 琉球大学 出席者: 上野

9月3日(金) ~ 9月11日(土)

博物館視察・タイ 出張者: 上野

## 博物館実習の実施

8月5日(火) ~ 8月11日(月)

午前10:00 ~ 午後4:00 参加者 16名

## 来館者数

4月1日(水) ~ 9月30日(木)

来館者数 2,069名(実習生を除く)

一般・学生来館者

4月 538名 5月 442名 6月 206名

7月 538名 8月 3名 9月 342名

(オープンキャンパス7月31日(土)・9月26日(日)の来館人数を含む)

## 来館者往来

[高等学校]

群馬県館林商業工業高校・同伊勢崎女子高校・埼玉県川本高校・同東京成徳大附属深谷高校・同児玉高校・同深谷高校・同与野高校(計8校)

[団体]

東北歴史博物館・フレネ自由教育フリースクールジャパンフレネ熊谷・群馬県埋蔵文化財調査事業団・クラブツーリズム・橘父兄会地方懇談会・ニュージーランド、インバーカーギル学生(計9団体)

## 出版物

立正大学博物館では平成15年下半年~16年上半年にかけて、下記の刊行物を発刊した。

・『万吉だより』第2号 (平成15年12月刊)

・『立正大学博物館年報』2 (平成16年3月刊)

・第2回企画展展示図録

『「南極、自然と人」— 南極観測の記録から —』

(平成16年4月刊)

## 普及と活動

第2回企画展の紹介

・4月17日(土)『埼玉新聞』(地域県北)

## 資料の貸出し

・7月13日~8月29日 東北歴史資料館

須恵器11点(砂田窯跡・持子沢窯跡出土)

・9月13日~12月3日 独立行政法人 奈良文化

財研究所飛鳥資料館 梵鐘1点

(伝櫃原市出土)

## 認可

当博物館は、2004(平成16)年3月30日付で、埼玉県教育委員会より博物館相当施設の認可を受けた。

## 見学者の声

立正大学博物館では、来館者の皆様の意見を反映するためメッセージ箱を備えております。下記のご意見は多数寄せられたものから事務局で選択させて頂いたものです。貴重なご意見、ありがとうございました。今後の博物館運営に役立たせていただきたいと思います。

- ・「南極、自然と人」をみて、今まであまり知らなかった南極観測の事についてわかりました。また、隕石も初めて見れたので良かったです。  
(県内・本学生・20歳男性)
- ・第2回企画展の展示ポスターのペンギンに惹かれて見に来ました。かわいらしく見えた姿が実は怒っている姿と聞いたときは驚きました。展示もわかりやすくとてもよかったです。  
(県内・本学生・19歳女性)
- ・初めて博物館を見に来ました。あまりの資料の多さにびっくりしました。特に入り口からの梵鐘などは、なかなかこんなにも一緒には見られないので良かったです。  
(県内・他大学生・21歳男性)
- ・南極の企画展を開催すると聞いて見に来ました。隕

石が展示されていて事務職員の方に、見た目は小さいですが一人で持つにはかなりの重さになると聞いてびっくりしました。  
(県内・一般・22歳男性)

- ・南極の企画展を見に来ました。激しい波しぶきを受けている観測船の写真をみて、いかに大変な所に行くのかが感じ取れました。また、クイズの景品のポストカードが良かったです。  
(県外・一般・30代女性)
- ・初めて博物館に来ました。大学に着いてから門から博物館に来るまで少々分かりにくかったので、もう少し案内板や学内の地図を設置して欲しいと思いました。  
(県内・一般・20代女性)
- ・展示の多さに驚きました。ただ読めない漢字とかもあるので、もう少し振り仮名をつけてもらいたいです。  
(県内・高校生・17歳女性)
- ・立正大学が発掘したネパール・ティラウラコット遺跡の資料が世界でもここでしかみることができないと聞き、貴重な資料が見学できて良かったです。  
(県外・一般・60代男性)

## 利用案内

所在地：〒360-0161

埼玉県熊谷市万吉1700

立正大学キャンパス内

TEL 048-536-6150

FAX 048-536-6170

開館日：月・水・木・金・土曜日

(大学休業中を除く)

開館時間：10:00~16:00

\*火・土・日・祝日、及び大学休業中(夏・冬・春  
期休暇等)に開館を希望する人は、事前に博物館

あるいは総務部総務課(048-536-6010)にご  
連絡ください。

交通機関：JR高崎線(上野から55分)、上越・長  
野新幹線(上野から35分)、「熊谷駅」  
下車。南口より立正大学行バス(国際  
バス)で約10分。東武東上線(池袋から56分)「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス(国際バス)で約12分。

## あとがき

博物館は、本年3月30日付で、博物館相当施設の認可が得られました。これにより、社会的に一定の評価を受けものと思っております。今後も企画展や特別展などをはじめとする教育普及活動によって、地域に根ざした博物館として更なる努力を続けていきたいと考えております。今後のご支援を宜しくお願いいたします。  
(上野)

題字揮毫 田淵 観 斎 氏 (立正大学名誉教授)

立正大学博物館館報 万吉だより 第3号

平成16(2004)年12月25日発行

編集・発行 立正大学博物館

〒360-0161 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL 048-536-6150

FAX 048-536-6170

Email: museum@ris.ac.jp

http://www.ris.ac.jp/museum/